

カフカの「恋人」ミレナ・イエセンスカ 没後80年

半田 幸子

NHKの朝のテレビ小説「虎に翼」のジェンダーの描き方が秀逸である。話題だ。ドラマの中の母・はるや主人公・真子の友人で義姉の花江の働きぶりも丁寧に描いているさまを見るたびに、ここで取り上げるジャーナリストの言説を思い出す。

チェコ人ジャーナリストト、ミレナ・イエセンスカ（1896〜1944）は、当時の活躍を知る人にはおそらく想定外なことに、長年、チェコのユダヤ系ドイツ語作家フランツ・カフカの「恋人」としてカフカ研究の周縁人物として

はんだ・さちこ 東 北大学大学院情報科学 研究科特任助教。著書に『チェコを知るための60章』（共著）『戦間期チェコのモード記者 ミレナ・イエセンスカの「仕事」―個―が衣装をつくる』



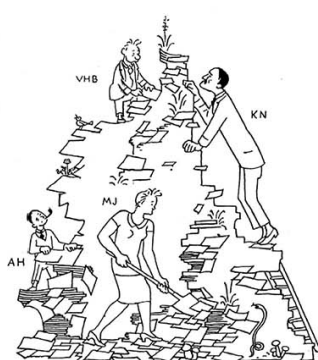
ブラハ生まれ。ジャーナリスト、編集者、翻訳者。著書に『ミレナのレシエ集』『シムプルへの道』『入が森をつく』(『ジ』すれも日 本語版は未刊) (筆者提供)

関心を寄せられてきた。今年、イエセンスカ没後80年という節目の年である。ここでは、イエセンスカの記者としての言説をジェンダー的観点から捉え、紹介したい。

モードと絡め 生き方を説く イエセンスカは19世紀

の終わりにエリート教育を受け、1920年代に華々しい活躍をし、37年からはナチスにペンを抵抗し、強制的収容所で最期を迎えた。彼女の複雑な生き方や波乱に富んだ人生について詳しくはぜひ伝記等を参照いただきたい。彼女は当時のプラハではカフカよりもるかに知名度が高く、戦間期のチェコで、翻訳者、エッセイスト、モード記者、ジャーナリストとして活躍した。イエセンスカへの関心の寄せられ方を見ると、すなわちカフカとの関係に、そこには働く女性も専業主婦も含まれていた。決してモードをないがしろにするわけではないが、それと絡めて生き方や考え方を説くことに重きを置いた。取り上げる服装は、機能的で合理的で簡素なもの。今の時代にも通用する考えだが、この考えは当時としては新しかった。モード史においてはシャネルのデザインと共通する。記事では、仕事着、家庭での服装、舞踏会用ドレス、スポーツウエアなどさまざまなものを取り上げた。日刊紙のモード欄であることから多様な読者を想定するのは当然とも言えるが、多様な生き方を肯定していた証左とも見える。

個人の自立を訴えた 女性ジャーナリスト



雑誌編集部で主体的に働くイエセンスカ(中央下)を描いた漫画『ペストリデン』1927年11月5日 第44号 (筆者提供)

家事も政治も重要と捉える 既述の通り、イエセンスカは長年カフカと絡めて語られることが多い。その

中での印象からフェミニストと誤解されることがある。フェミニストの定義にもよるが、彼女は女性解放運動の推進者でも協力者でもなく、彼女の言説が当時のフェミニストらの反感を買ったこともあった。つまり、いわゆる「フェミニスト」ではない。一方、女性には家庭を守るべきなど保守的な考えを持っていただけでもない。文筆家として活躍する彼女自身が体現するよう、女性には経済的かつ精神的な自立を求めると同時に、家事を些事なことと捉えず政治と等しく重要なことと捉え、主婦という在り方も肯定した。

冒頭の「虎に翼」が法律家となった主人公だけでなく、主婦である母や義姉をも丁寧に描いているのを見るたびに、イエセンスカの捉え方が想起される。今の時代の言葉と概念を用い

れば、イエセンスカは、まさに女性の多様な生き方を認め、それを支える礎とならない。